

親鸞仏教センター定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅱ期・第 10 回（通算第 16 回）

第二章 「ただ念仏」の仏道——「先師口伝」の伝統（6）

I 第二章のまとめ

・第二章は、親鸞聖人自身がその法然聖人の「先師口伝の真信」の仏道を相続していくときの姿勢を感銘深く伝えている。また第一章で示された仏道の根源が「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という「よきひとのおおせ」として表現されている。

・第二章は、漢文序で「先師口伝」として確かめられた事実を、親鸞聖人自身がその源空聖人の仏道を相続していく姿勢を表白し、私たちの聞法の姿勢についてラディカルに問いかける物語である。つまり浄土真宗という仏道において師の教えを聞くことの意義が確かめられている。「先師口伝の真信」は、宗教的伝統（マコトとオホセ）に由来することが示される。

・第二章を「先師口伝之真信に異なることを歎く」という視点からみると、とくに「先師口伝」ということが「真信」にもつ意義を回復するための師訓と位置づけることができる。つまり浄土真宗という宗教的伝統において、真信（宗教的目覚め）に対して先師口伝（師の教え）とはどのような意味を有するかが明らかにされる。

・第二章は「先師口伝の真信」という視点からみると、とくに「先師の口伝」を後学が相続していくにあたっての姿勢がラディカルに表明されている。親鸞が法然の宗教言説を「よきひとのおほせ」として伝承し相続していくときの核心が表明されている。

・指摘があったように、第二章の背景には、おそらく善鸞事件を原因とする門弟たちの問いがあったことは間違いない（第一回の資料で消息などを紹介しています）。しかし『歎異抄』があえて物語の特殊な事情を取りあげないという文体の性格を大事にしてみたいと思う。

II 第二章の段落

・生きた文章の段落分けは便宜的なものでしかない。第二章は、大きくは、門弟たちの姿勢を問い直す①～③と親鸞自身の姿勢を表明する④～⑫に分けることができ、⑬がこの二つを受けた門弟たちへの促しということになろう。

・加来案（「〔先〕師口伝」に注目した段落分け）

（1）「おのおの十余ヶ国の～」①～③

「師〔親鸞〕口伝」に期待した門弟たちへの親鸞の対応。

（2）「親鸞におきては～」③～⑦

「先師〔源空〕口伝」に対する親鸞自身の受け止めの開頭。

（3）「弥陀の本願～」⑧～⑫

「口伝の真信」の根拠となる本願の歴史を示す。「弥陀ノ本願マコト」から始まる師教の歴史。

(4) 「詮ずるところ」「このうえは～」⑫⑬

(2) (1) を受けて「師口伝」に対する姿勢を示す。

このように「師口伝」は、弟子の往生を保証するようなものではなく、弟子の主体的  
選び（真信）を呼び起こすことが示される。

①～③とそれ以下について「第二章の構造はさまざまな視点が成り立つが、私は「先師  
口伝」について「おのおの」と「親鸞におきては」とが対比的に語られているとみたい。  
つまり「(1) ①～③と(2) ④～において、門弟たちが師親鸞の「師口伝」に期待したこ  
とと、親鸞が師法然の「師口伝」（ヨキヒトノオホセ）に与えられた目覚めとの差異が対比  
されて印象深く語られるものとして受けとめたいのです。」（第一回資料）

### Ⅲ 第二章現代語訳（加来案）

・安良岡訳を参照する理由。国文学からの示唆。

| 蓮如書写本第二章<br>(ただし段落と番号①～⑬は加来<br>が便宜的に分けた)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               | 第二章口訳<br>(安良岡康作『歎異抄全講読』大蔵出版、1990 年、<br>71－73 頁) の基づく。黄色マーカーは加来訳)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>二<br/>一</p> <p>① <b>おのゝ</b>の十余ヶ国のさかひ<br/>をこえて、身命をかへりみずして<br/>たづねきたらしめたまふ御こゝろ<br/>ざし、ひとへに往生極樂の<b>みち</b>を<br/>とひきかんがためなり。</p> <p>②しかるに、念仏よりほかに往<br/>生の<b>みち</b>をも<b>存知し</b>、また法文等<br/>をもしりたるらんと、こゝろに<br/>くゝおぼしめしておはしましては<br/>んべらんは、おほきなるあやまり<br/>なり。</p> <p>③もししからば、南都・北嶺に<br/>もゆゝしき学生たち、おほく座せ<br/>られてさふらうなれば、<b>かのひと</b><br/>にもあひたてまつりて、往生の<b>要</b><br/>よくゝゝきかるべきなり。</p> <p>④親鸞におきては、<b>たゞ</b>念仏し<br/>て弥陀にたすけられまひらすべし<br/>と、<b>よきひと</b>のおほせをかぶりて</p> | <p>一（第二章）</p> <p>(1) ① <b>皆さん方</b> (<b>おのおの</b>) が、十以上もの国<br/>境を越えて、〔わが〕身・〔わが〕命を思い返さな<br/>いで、〔私を〕お尋ねにおいでになりました、〔そ<br/>の〕ご意向は、いちずに、極樂に往生する<b>道</b> (<b>手だ<br/>て</b>) を問い尋ねようとするためであります</p> <p>②ところが、念仏より外〈ほか〉に、往生の道<br/>(手だて) を<b>存知し</b> (<b>心得</b>) ており、また、〔往生<br/>のための〕<b>法門</b> (<b>教え</b>) を書いた文章などを知って<br/>いるであろうと、私に関心を持って知りたいと思い<br/>になっておいでになりますならば、〔それは〕大き<br/>なまちがいです。</p> <p>③もしそう〔お思い〕ならば、奈良の都や比叡山<br/>にも、すばらしい学僧たちが数多くおいでになりま<br/>すそうですから、<b>その人</b> (<b>それらの人々</b>) にもお逢<br/>い申し上げて、極樂に往生するための必要なこと<br/>(<b>大事なこと</b>) を、念を入れてお尋ねになるのがよ<br/>いのです。</p> <p>(2) ④〔この〕親鸞においては、<b>ただ</b> (<b>ひたす<br/>ら</b>) 念仏<b>して</b> (<b>をとなえて</b>)、阿弥陀如来のお助け<br/>をこうむるのがよいという、<b>よき人</b> (<b>すぐれた人</b>)<br/>の<b>仰せ</b> (<b>お言葉</b>) を身に受けて、〔それを〕信ずる<br/>以外には、各別の理由はないのです。</p> |

信ずるほかに、別の子細なきなり。

⑤念仏は、まことに浄土にむまるゝたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん。総じてもて存知せざるなり。

⑥たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらう。

⑦そのゆへは、自余の行もはげみて仏になるべかりける身が、念仏をまふして地獄にもおちてさふらはじこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

⑧弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。

⑨仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。

⑩善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。

⑪法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらう歟。

⑫詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。

⑬このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと{云々}。

⑤念仏(を申すこと)は、ほんとうに、(〔極楽〕)浄土に(〔往って〕)生れる種(因くもと)なのでございましょうか、あるいは、地獄に堕ちるはずのしわざなのでございましょうか、全然、〔私は〕存知し(心得)ておりません。

⑥〔私としましては、〕たとい、法然聖人におだましをこうむって、念仏したことで地獄に堕ちてしまったとしても、決して後悔するはずはございせん。

⑦そのわけは、〔念仏〕以外の修行に励んで(精進・努力して)仏に成ることができた身(私)が、念仏を申して、〔そのため、〕地獄にも堕ちますのならば、それこそ、おだましをこうむっ〔て堕ちてしまっ〕たのだという後悔もございましょうが、しかし、どのような修行にも達し難い身(私)なのですから、結局のところ、地獄はただ一つの定った住処(きつと堕ちてとどまる所)なのですぞ。

(3) ⑧弥陀の本願がまこと(真実)であらせられるならば、釈尊のご説教が虚しい言葉(偽り言)のはずがありません。

⑨目覚めた方(釈尊)のご説教がまこと(真実)であらせられますならば、善導大師の御解釈が虚しい言葉(偽り言)を言われるはずはありません。

⑩善導の御解釈がまこと(真実)ならば、法然聖人の仰せ(お言葉)が、〔どうして〕空しい言葉(偽り言)でありましょうか。

⑪〔その〕法然聖人の仰せ(お言葉)がまことならば、この親鸞が申します宗旨趣旨も、また〔同じように〕、空しい(根拠のない)はずはございせんよ。

(4) ⑫結局のところ、〔この〕愚かな身(私)の信心においては、このようなものです。

⑬こう申し上げたからには、念仏を採用してお信じ致そうとも、あるいは捨てようとも、お一人おひとり(皆さん各自)のお考え次第です。と〔親鸞聖人は〕物語られました(……)

## (1)

- ・①「おのおのの」——⑬「面々の」との対応。
- ・「念仏よりほかに往生のみちをも存知した法文等をもしるたるらんと」  
「往生のみちをも存知し〔たるらん〕……行的関心  
念仏よりほかに―  
―また法文等をしりたるらん……知的関心
- ・「ひとえに往生極楽の道をといきかんがため」という押さえにどのような問題が見出されていたのか。彼らは、師の言葉から何を聞こうとしていたのか。——門弟がたの「ひとえに」から親鸞聖人の「ただ」へ。——門弟がたの心の至奥に存在する念仏の行を選び取る深い関心へ。
- ・「南都北嶺にも」——この二つの名をあげる関心には専修念仏停止という事件がある——聖道門か、浄土宗かという選択を象徴的にあらわすため
- ・「往生の要」は、第十二章に「そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや」とあることから「往生に必要なこと」と訳してみた。

## (2)

- ・④「親鸞におきては」と⑫「愚身の信心におきてはかくのごとし」との呼応。
- ・親鸞が信じた「よきひとのおほせ」の本質とはなにか——「念仏」という行も「弥陀にたすけられる」という救いもすでに比叡山には存在した。なんでもある比叡山になかったもの、それが「ただ」という選択の精神である。——「ただ」の衝撃。——「ただ信心を要とすとしるべし」（第一章）と「ただ念仏」（第二章、後述）
- ・「よきひとのおほせ」とは「先師口伝」をあらわす。「よきひとのおほせ」は当時一般的であった「口伝」とはまったく異なった質をもった言語活動をあらわしている。——「よきひとのおほせを信ずる」のではなく、「よきひとのおほせをかぶりて信ずる」と表現されるような質をもつ経験——対象論理の信か、場所的論理の信か。
- ・「念仏して」がないと人格への執着になってしまう。——地獄に堕ちても後悔しないという「地獄は一定すみか」の自覚の根底に法蔵菩薩の願心に対する深信を見出してみたい。

「仮令（たとい）、身を 諸（もろもろ）の苦毒の中に止（お）くとも、我、行ずること精進にして、（我が行は精進にして）忍んで終（つい）に悔（く）いざらん。」

（『大無量寿経』嘆仏偈『聖典』13頁）

- ・「いづれの行もおよびがたき身」という自覚は、個人的なものか、全人的なものか。この個人の最も深い有限性の自覚が、すべての他者の連帯を可能にする共同性の地平を開くのでは。

## (3)

- ・浄土の教えが二尊教であること——「信仰の健康性」（安田理深）、信仰の病気・病気の信仰——弥陀・釈迦の次第か、釈迦・弥陀の次第か。

|    |   |         |     |
|----|---|---------|-----|
| 弥陀 | 法 | 願言（みこと） | 超歴史 |
| 釈尊 | 人 | 教説（みのり） | 歴史  |

・「まこと」とはなにか——「聖人のおおせには、「善惡のふたつ総じてもって存知せざるなり。……煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とこそおおせはそうらいしか。」（『聖典』〔初版〕640－641頁）

「よろずのこと（万の言）」

「そらごと（虚言・空言）」——仮？——「虚なる者は、はなはだもって滋し」（「化身土巻」『聖典』〔初版〕326頁）

「たわごと（戯言）」——偽？——「偽なる者は、はなはだもって多く」（同上）

「まこと——（真言・実言）」——「摂取不捨の真言」（総序）、「応信如来如実言」（正信偈）

・「またもてむなしかるべからずさふらう歟」——親鸞にとっての「空過」という問題  
「曠劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき 本師源空いまさずは このたびむなしくすぎなまし」（『高僧和讃』源空聖人、『聖典』498頁）

#### （４）

・「愚〔かな〕身」の自覚という伝統

善導……「我等愚痴身 曠劫来流転 今逢釈迦仏 末法之遺跡 弥陀本誓願 極樂之要門」（『観経疏』玄義分、『聖典』147頁）

法然……「一文不知の愚どんの身になして、」（『一枚起請文』『聖典』962頁）。

親鸞……「いつれの行もおよびがたき身」「愚禿釈親鸞」

・「面々の御はからひなり」——信仰における選びが一人ひとりの主体的な決断であること、また師と弟子との関係の健康性をよくあらわす言葉。

・「念仏」対する主体的な決断——「とりて信じたてまつらん」と「すてん」

## IV 第二章と第十二章との照応

・近角常観は、第十二章の異義が第二章の師訓と照応していることを指摘している。

・第十二章に示される異義は、「経釈をよみ学せざるともがら、往生不定のよしのこと」（『浄典全二』1061頁）である。この異義に対して唯円は「この條、すこぶる不足言の義といひつべし」（『浄典全二』1061頁）と厳しく批判している。ここでいう「不足言」は「言うに足らない」という意味である。

・第十二章の主題は、宗教言説に関わるときの信と知の問題——知的関心（学問）は無用であったり、否定されるべきものではないが、信念とは峻別されなければならない。——第十二章は、宗教言説における知と信とのあり方を厳密に区別し、その関係をあきらかにしようとする。

「他力真実のむねをあかせるもろもろの正教は、本願を信じ念仏をまふさば仏になる。そのほか、なにの学問かは往生の要なるべきや。まことに、このことはりにまよへらんひとは、いかにもいかにも学問して、本願のむねをしるべきない。経釈をよみ学すといへども、聖教の本意をこころえざる條、もとも不便のとなり。」（『浄典全二』1061頁）

「ただ 念仏して 弥陀にたすけられまひらすべし

「本願を信じ 念仏をまふさば 仏なる

・蓮如書写本の第十二章では、「正教」と「聖教」が区別されているようである。——  
「経釈をよみ学す」とき、「正教」は経釈に説かれる正しい教えをあらわし、「聖教」は経  
釈が記されたテキストを指しているようである。

・蓮如書写本の第十二章では、「学問」と「学文」が区別されているようである。——  
「学問」は必要とされかならずも否定されないが、「学文」については「此の世には、学文  
してひとのそしりをやめ」や「学文してこそなんどといひおどさるること」とあり否定的に  
用いられている。——「一文不通」という人々に眼差しを向ける『歎異抄』の著者において  
は、「学文」という存知的な関心は批判される。

・曾我量深は「まことに、このことわりにまよえらんひとは、いかにもいかにも学問し  
て、本願のむねをしるべきなり」という句を受けて、学問の必要性を自身にとってと他者に  
にとってという二方面から確かめようとしているようである。

「学問によって妄念妄想のいわれなきことを反省し、本願の道理をしらしていただく、  
そこにはじめて学問の必要があり、また学問の趣旨もいかなるものであるかも、これを  
もって知るべきである。」（曾我量深『歎異抄聴記』東本願寺文庫、336 頁）

「ただ学問の必要なのは回心の機である。宗学は回心の機にして学問が必要、直入の機  
には学問はいらぬ。自分自身は直入の機であっても、世の中には回心の機はたくさんい  
るので、人を教えるためにまた宗学が必要ということもある。」（曾我量深『歎異抄聴  
記』東本願寺文庫、334 頁）

「個人としてはそれでよいが、しかし時代に応ずるためには学問が必要となってくる。  
歴史的時代に生存しているかぎり、自分ひとりいるのではない。自分は他人と交渉して  
いる、そこに学問が必要になってくる。」（曾我量深『歎異抄聴記』東本願寺文庫、  
335 頁）

「愚痴にかえるときは、どれほど学問があってもなんらたしにならぬし、またさまたげ  
にもならぬ。しかし聖人が時代をみちびかれるときになると、その学問が生きてくる。  
浄土真宗の広大な法門ができあがってくる。だからして学問は聖人自身のためにはなん  
の必要もない。」（曾我量深『歎異抄聴記』東本願寺文庫、337 頁）